

---

# メイド様の恋心

ユーリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メイド様の恋心

### 【Nコード】

N8484T

### 【作者名】

ユーリ

### 【あらすじ】

鮎沢美咲は、またメイド・ラテで留守番をする事となった。1度不審者を捕まえているため自信があった彼女だが、今回は果たしてどうなのか・・・？

ここは星華高校。

生徒の半数以上が男子という高校である。

生徒会も当然男子生徒が大半だ。

ただ1人、生徒会長を除いては・・・

ユキムラシヨウイチロウ  
幸村祥一郎『星華高校 生徒会副会長』

「会長、今度の学園祭の案に関する書類まとまりました。」

「ああ、ご苦労幸村。そこに置いておいてくれ。」

今会長と呼ばれたこの人物こそ、女子生徒にして初の生徒会長・・・

アユザワ ミサキ  
鮎沢美咲である。

鮎沢美咲

『星華高校 生徒会長』

「フウ・・・」

「かゝいちよ お疲れ様。」

美咲

「碓水・・・」

この男は碓水拓海。  
ウスイ タクミ

頻繁に生徒会室に出入りしている男だ。

そして、美咲のある秘密を知る人物でもある。

そう、実は美咲・・・

メイド喫茶『メイド・ラテ』

美咲

「お帰りなさいませ、ご主人様」

美咲は放課後、メイド喫茶で働いているのだ。

会長の威厳に関わるため、学校には内密にしていたのだが・・・

拓海

「かゝいちよ」

この男、碓水拓海にはうっかりバレてしまった。

しかし彼は、周囲に無理にバラそうとはしなかった。

それどころか、時折美咲の事を気にかけている節があるのだ。

最も、その行動が直球過ぎて彼女には変態呼ばわりされているが・・・

・

## 閉店間際

兵藤さつき

『メイド・ラテ 店長』

「ハア、どうしよう・・・」

美咲

「どうかなさったんですか、店長？」

さつき

「またちよつと出かけなくちゃならなくなったの・・・最近閉店後を狙った空き巣が後を絶たないって言うし、ちよつぱり不安だわ・・・」

美咲

「だったら、また私が留守番してましようか？」

さつき

「ダ、ダメよ！美咲ちゃん、こないだストーカーに襲われたばかりじゃない！」

美咲

「あの時は不意をつかれただけです。今度は大丈夫ですから！」

拓海

「本当に大丈夫？こないだのストーカーは素人だから良かったけど、

今度の空き巣は言わばその手のプロだよ?」

美咲

「う・・・」

さつき

「じゃあ、碓水君と美咲ちゃんでお留守番しといてくれない?」

美咲

「ハア、別に構いませんが・・・」

さつき

「2人共ゴメンね!なるべく早く戻るから・・・」

拓海

「いえ、別に何時間かかっても良いですよ。」

美咲

「黙ってるアホ碓水!!」

そして、さつきは出かけて行った。

拓海

「そういえば学園祭の出し物何に決まったの?」

美咲

「今回は色々案が出てるからな、選ぶのが楽しみだ。」

拓海

「フーン・・・鮎沢、喉乾かない？」

美咲

「そついえばちょうど喉が乾いてたな。買ってきてくれるのか？」

拓海

「ヒマだからね。何が良い？」

美咲

「じゃあ、紅茶系統を頼むよ。」

拓海

「了解。気をつけてよ。」

美咲

「大丈夫、問題ないから！」

拓海

「・・・そうか・・・じゃ、行つて来る。」

美咲

「ああ・・・（何だ？今の間は・・・？）」

碓水が出てたら数10分後・・・

美咲は店の戸締まりをしていた。

美咲

「よし、裏口もちゃんと鍵掛かってるな。あ、2階もちゃんとチエツクしとかないと・・・」

美咲は2階へと上がって行く。

裏口が静かに開けられているとも知らないで・・・

美咲

「よし、2階も大丈夫だ。下に降りるか・・・」

美咲は2階の施錠を確認すると、階段を降りて行った。

キリキリキリ・・・

ガコン！

ガチャ！

美咲

「店長遅いなあ・・・確水もまだ帰って来ない・・・遠くのコンビニに行っただんだろうか？」

美咲がそんな事を考えていると、控え室の方から何やら物音がした。

ゴソゴソ！



美咲

「ん？碓水が帰って来てたのかな？」

美咲は控え室に向かう。

ガチャ！

美咲

「碓水ー、帰ってたんなら声ぐらいかけ……ろ……」

美咲の瞳に映ったのは、碓水ではなかった。

サングラスとマスクで顔を隠した、いかにも怪しげなヤツだ。

何やら、部屋内を物色していたようだ。

美咲

「誰だ、オマエは……？あ！さてはウワサの空き巣だな！！」

「……」

男は無言でスタンガンを懷から取り出すと、美咲に向かって来た。

美咲

「女だからといってナメるなよ！こっちは合気道を嗜んでるんだ！  
！」

そう言うが早いか、美咲は男を掴むと素早く床に叩きつける。

ブン！！

ドサッ！！

美咲

「フン、口ほどにもない！」

そう言って立っている美咲の背後から、静かに何者かが忍び寄る。

次の瞬間、美咲は背後から羽交い締めになされてしまった。

ガシッ！

美咲

「うわっ！！な、何だ！？」

美咲は暴れる。

美咲を羽交い締めになっている影は、ズボンから何やら湿ったハンカチを取り出した。

そしてそれを美咲の口に当て、口を塞ぐ。

ガバッ！！

美咲

「ムグッ！！」

美咲は必死にもがいた。

しかし、段々と目がトロンとなる。

美咲

「うう・・・（ね・・・眠・・・い・・・）」

美咲は気を失うと、床に倒れ込む。

ドサッ！

影は不敵に笑うと、美咲を肩に担ぎ運んで行った。

美咲

「ん・・・」

頭がクラクラする中、美咲はようやく目が覚めた。

美咲

「ん・・・んっ!？」

美咲は立ち上がろうとして、自分の状態に気がついた。

美咲は手足と体をロープでグルグル巻きに縛られていたのだ。

さらに口にはガムテープが貼られ、口を塞がれている。

美咲

「んっ、んっ!!」

美咲はジタバタともがいたが、キツく縛られているらしくロープはビクともしなかった。

美咲

「ううっん・・・」

美咲はうつむく。

美咲

「（そうだ、確か私・・・あの時怪しげなヤツを倒したすぐ後に後ろから口を塞がれて・・・）」

美咲は辺りを見回す。

すると、3人組の男が店内を物色していた。

美咲

「（3人共サングラスで顔を隠してる。これじゃ素顔がわからないな・・・）」

美咲は男達を観察している。

すると突然、男の1人が美咲の方を向いた。

「おっと、店員が起きたみたいだぜ。」

美咲

「・・・」

男達は美咲に近づく。

「気分はどうだ？お嬢さんよ。」

美咲は男達を睨みつける。

「強気なお嬢さんみたいだな。オレそういうの嫌いじゃないぜ。」

そう言うと、男は美咲の顎に指を当てた。

クイツ！

美咲

「んんっ！！」

「まあ、静かにしとけよ。大人しくしとけば、何もしない。」

そう言うと、男達は再び物色を始めた。

美咲

「（どうしょ・・・何とか碓水にこの状況を伝えたいけど・・・）」

美咲は碓水に状況を伝えたかった。

しかし今彼女は拘束されていて、口も塞がれている。

何もできない自分が、美咲は悔しかった。

「さてと、結構金が入ったな。」

「で、どうするよこのお嬢さん？」

「こんな店でバイトしてんだ、家も割と裕福だろう。」

「そうだな。どうせならこのお嬢さんを誘拐して、親から身代金でもせしめるか・・・」

美咲

「!!!」

男達は美咲に近づく。

美咲

「ん、んんっ・・・」

「そんなワケだ、しばらく眠っててもらっぜ？」

男の1人はポケットからハンカチを取り出す。

美咲

「んんんっ!!!（誰かっっ!!!）」

男の1人が美咲の口を塞ごうとした、その時だった。

「鮎沢っ!」

玄関の方から声がした。

美咲

「（碓水だ・・・）」

「何だ、今の声は？」

「オマエら、玄関見て来い。」

リーダーの指示で、2人の男が玄関に向かった。

「グアッ!!」

「!？」

リーダーの男が聞いたのは、2人の仲間の呻き声だ。

「チイツ・・・」

リーダーは事確かめようと、玄関に向かう。

「ガハッ・・・」

程なく、リーダーの男の呻き声も聞こえた。

拓海

「鮎沢!!」

美咲の目に碓水の姿が映った。

美咲

「んん!!（碓水!!）」

碓氷は美咲に駆け寄ると、口のガムテープをはがし彼女の拘束を解いた。

拓海

「何やってんだ鮎沢！！だからあれ程言っただろ・・・ん？」

美咲は碓氷に抱きついていた。

拓海

「・・・鮎沢？」

美咲

「・・・怖かった・・・」

その後、強盗3人組は警察に連行されて行った。

それから数日後・・・

美咲

「碓氷、これ！新しいメニューなんだけど・・・」

拓海

「うん・・・なかなかいけるね・・・」

美咲

「そうか、良かった・・・」

兵藤葵



「ミサキチ！」

美咲

「ん？なあとに葵ちゃん。」

葵

「最近ミサキチさ、妙に碓氷と仲良いわよね。」

美咲

「え！？」

葵

「何かあったの？」

美咲

「あ、イヤ、ちょっとね……」

葵

「フーン……」

美咲

「（碓氷……この間は助けてくれてありがとう……今はまだ素直になれないけど、この気持ちが落ち着いたらちゃんと伝えるから……好きだよ、拓海……）」

美咲が自分の気持ちに気付き碓氷に告白するのは、まだもう少し先の話……

おしまい



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8484t/>

---

メイド様の恋心

2011年10月3日04時28分発行